

ひまわりからの メッセージ

64号

2016.8.10

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

人間の分際ぶんがい



本屋さんまで行って、曾野綾子さんの『人間の分際』という本の題名に惹かれて読んでみることにしました。

その中に、東京オリンピックに関して書かれた文章がありました。東洋の魔女と呼ばれた日本の女子バレーボールチームの監督であった大松さんの「成せば為る」ということばに対して「人間の世界には、どんなに為そうとしても成し得ないことがある。その悲しみを知るのが人間の分際であり、賢さだろう」と書かれました。折しもリオオリンピックの年です。さて私たちはオリンピックに対してどんな態度でのぞむのだろうか……と考えさせられたことでした。

ところで、先日、予想だにしなかった事件が起こりました。相模原の施設で起きた事件は、本当に衝撃でした。今年は、

「障害者差別解消法」が制定されましたが、そもそも差別や偏見が存在するからこそ作られた法律です。

相模原事件を知って私は三十数年前に聞いたことばを思い出しました。障がいをもつ吾が子を手にかけて死なせてしまった親さんに対して情状酌量が求められることが多かった時代のことです。脳性小児まひであったその人は、障害者差別とたたかっていました。が、「ぼくたち障害者は、障害があるからという理由で、親の手にかかって、喜んで命を落とさなければならぬのでしょうか……？」と、言われたのでした。今も忘れることのできないことばでした。では皆さんは、そのことばの重みをどのように受け取られるでしょうか。

相模原事件の如被害者は、どんな気持ちでいたのでしょうか。自分が神にでもなったつもりだったのでしようか。

恐怖、衝撃、痛みや悲しみ、憤り、苦しみ、不甲斐なさ等々、私たちは様々な思いを抱いてこの事件に向き合いました。が一人の人間の間違った思想があんなことをしたのだと言えるでしょうか。本当は、一人一人の内なる問題として、真剣に向き合うべきなのではないでしょうか。

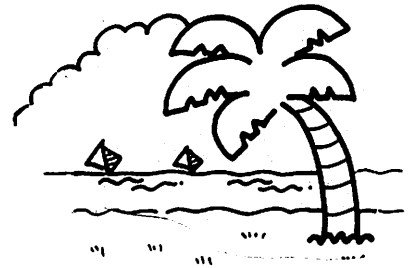
「分際」とは、身のほどを知ることです。自分の身のほどを知るとは、なかなか難しいものだと思います。

ことばの難しき

聞くこと、話すこと

記憶すること、思い出すこと

そして考えをまとめること



過日、洋画の日本語版の字幕を作成している方に会う機会がありました。出演者の口に合わせて上手に台詞を入れていかなくてもならないので大変な仕事です。台詞を日本語に訳すだけでも大変なのに各々俳優さんたちの表情に合わせて、ストーリーに合ったことばを入れていくのですから、語学力と表現力が要求されるわけです。

その方の名は、古田由紀子さんとおっしゃって、長年字幕翻訳家として活動してこられた方なのですが、講演会の主催は何と、短歌の国際交流の集まりでした。

一見、何の関係も無いように思いますが、両者に共通する点とは、「ことばを大切にすること」ということではないかと気づかされました。現代は、外国の方が自国語で短歌を作る時代になりましたが、どんな短いことばで適切に表現するかが両者に共通の課題なのですよね。

そこで今回は、ことばについて書いてみることにしました。

幼児期から大切な

聞くこと、話すこと

最近の子どもたちは、知っていることばの数が少なくなったのではないかと思います。

先日、名古屋から東京まで新幹線に乗りましたが、乗り合わせた親子四人は、とうとう東京に着くまで無言で、各々が手に持ったスマホやゲームに夢中でした。親子は私よりも前から乗っていましたから、乗り込んだ直後から、ずっとだったのかなあと思いました。

幼児期、子どもたちは発音不明瞭なことばで一生けん命に大人に話しかけてきます。実は、そのおしゃべりが、子どもたちのことばの練習になり、口腔機能を育てているのです。食事でも、もちろん関係してはいますが、おしゃべりを楽しくすること、それを大人が喜んで聞いてくれることで、子どもたちは満たされ、心豊かに育っていくのです。

でも今、スマホ片手に子どもの話を聞いている(？)お母さんの何と多いことでしょう。小学生の子どもの切なる願いが「私の方を見て私の話を聞いてほしい」ということだと知ると、切なくなります。子どもたちのコミュニケーション不足を言う前に、衿を正すべきは、大人の方かもしれませ



ん。ことばが、感情のある生きたことばとして機能するためには、人とかかわりの中で使われることが大切なのは言うまでもないことです。

大人にきくと話を聞いてもうえなかった子が、相手の話が聞ける子に育つでしょうか。実は、話すことと聞くことは、表裏一体だと私は思うのです。

子どもの話をいっぱい聞いて、時に合いの手を入れたり、子どものことばに少しことばを付け加えて返したりするなかで、「コミュニケーション」としてのことばが育ちます。そして「今度はママが話してもいいかなあ」と言った時には、きっとこちらに注目してくれることばでしょう。もちろん、先生にも……。

とは言え、集中が続かない、すぐに注意がされてしまうような子には、聞かせるための工夫が必要です。「話をします」と前おきするなり、名を呼ぶなりしてから、両手を握って少し揺すってみて、ふっと視線を一瞬合わせてくれたところで、話を具体的に端的に伝えます。今までやってきた中では、この方法が一番良いように思います。ただ、今まで叱られる時に、常に「こっち見てー、目を見てー、ダメでしょう!!」等々嫌な場面だけ呼ばれている子には、効果は少ないかもしれません。手を握った時、手の感触を通して「あなたのことが好き、大切に思っているよ」というメッセージをこめて握ることが大切でしょうけれど……。

耳が聞こえていても、「ことば」として入っていかなければ私たちのことばは雑音と同じです。人のことばを、「ことば」として聴く力を幼児期からつけてあげたいものです。

子どもの聞き違いと思い込み



「一家団らん」ということばがあります。私の娘は「一家ランラン」と覚えて、かなり大きくなるまでそう思っていたそうです。一家が楽しくランランという気持ちでいるという解釈をしたのです。「ラ行」と「タ行」の聞きまちがいは、小学校低学年の子の中には、かなりいるでしょう。ウエクスラー検査の「タイヤ」を「たいやき」、「胃は？」を「岩」と聞く子もいます。つまり、子どもたちは、はじめて聞くことばだと、必死に自分の経験や知っていることばに置きかえて理解しようとすることもあるのです。

また、思い込みということもあります。周りが見えていながら、言葉のイメージがとらえにくい子だと、思いちがいをしてしまうこともあります。相手のことはもう受け取る感じは人それぞれですが、誤解したままにしていくと、大変なことになることもあります。「冗談のつもり」が冗談ではすまないことも起ります。子どもの方から「それはどういう意味ですか」と聞いてくる場合もありますが、表現する力

が弱い子であれば、誰にも言えずに心の中にしまいでし
まって不登校になってしまふケースもあるでしょう。大人
として、不用意なことはほされたいものです。

聴覚的な記銘力

私たちは、ことばとして聞いたことを一度脳に記憶させま
す。そしてそれらの情報を頭の中で組み立て直して、時
系列に並べかえたり、あるものとあるものをまとめ上げたり
して結論を導き出していきます。

ところが、言われた時には覚えていて、「はい」と返事を
したのに、すぐに忘れてしまつて、「言ったでは、聞いてな
かったの」と叱られる子も少なからずいるものです。こと
ばという形の残らないものは、あとで確かめようがないので
から、本人を責めてもどうにもなりません。

記憶は脳の海馬(かいば)という所がつかさどっていると言
われていて、海馬には、思い出させない記憶もしっかりと記
憶されているのだと聞いたことがあります。 私たちが必
要とする時に記憶していた事柄をすぐに思い出さ
ることができれば問題ありませんが、さううまくはいき
ません。ことばにしても、知っていることばがすつと出て
こなくて困ることは、よくあることです。

忘れっぽくて、すぐに忘れてしまふ子の場合、メモと
する習慣をつけさせてみましょう。もちろん私なん
かは不注意があるのでメモをしたメモ用紙をど
こかへやっつけてしまふことも多いのですが……。最近、大
人のAD/HDのことが言われはじめています。上司のこと
ばをすぐ忘れてしまふようでは職場で困ってしまいます。
メモを取る、書きとめることは欠かせないことです。

いくつ言われたか、すぐに忘れてしまふようであれば
お手伝いなど頼んだり、伝言ゲームをしたり、言われ
たことばを思い出して書くなどというゲームも考えてみ
るといいかもしれません。小さい時から「聞く」ことを
意識させていきたいものです。

紙面がなくなつてきました。最後に、ことばに意味づけ
させてあげることばで記憶していくことができれば、
ことばと意味を結びつけて覚えるのです。

私たちは一人ひとり、得意なこと、不得手なことがち
がいます。自分の得意な方法が早く見つけられるま
うに、支えていきたいものです。

九月例会は、奥の細道記念館です。

